

# ① 教科書的バブル史

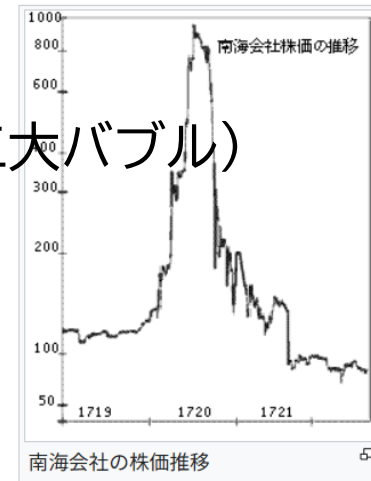
## ○1630年代のチューリップバブル(オランダ)

- ・球根価格が高騰(センペル・アウグストゥスは1億円超)
- ・信用、先物取引が活発化し希少品が投機対象となるが、突然終了



## ○1720年の南海泡沫事件(英国)

- ・英国債務を南海会社が肩代わりするスキームだが暴落、ニュートンも10億円損失
- ・同時期に仏国ではミシシッピバブルが発生(チューリップ、南海泡沫、ミシシッピが世界三大バブル)



## ○1910年代の第一次大戦バブル(日本)

- ・戦争特需で桁外れの船成金が誕生(教科書で有名な絵)
- ・株高によって有名相場師も誕生(野村徳七、福沢桃介など)



## ② バブルの共通構造

- 新技術・新時代への期待・・・「世界が変わる」という期待が、高値でも買われる熱狂を生む
- 金余り・金融緩和・・・低金利と金融緩和による余剰資金が市場へ流入する
- レバレッジ拡大・・・借入や信用取引が相場上昇と暴落を加速させる
- メディア熱狂・・・成功者報道が「乗り遅れるな」という空気を生み出す
- 個人投資家・・・参入普段投資をしない層まで市場へ流入し始める
- もう古い常識は通用しない・・・「今回は違う」という言葉が熱狂を正当化していく
- 急騰の後の崩壊・・・上記の結果、急騰した後に崩壊し多くの人々がダメージを負う

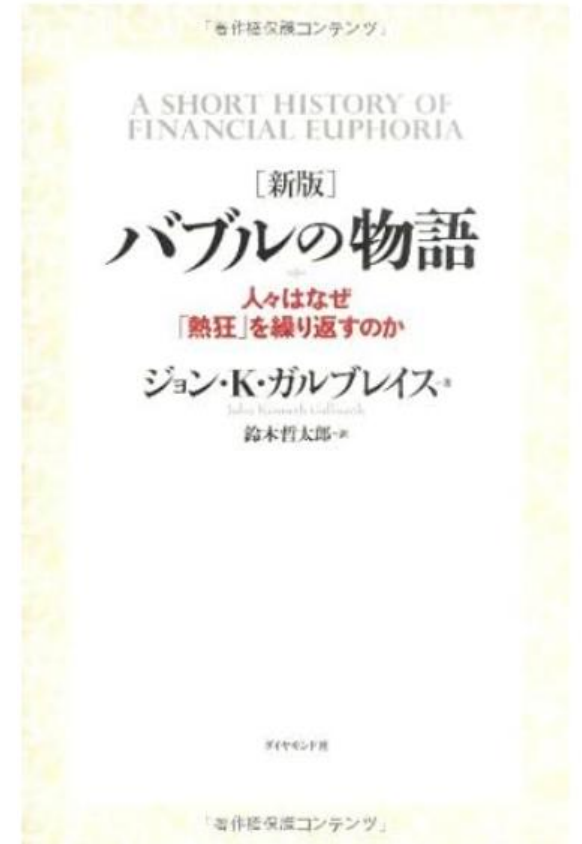


「人間の欲望」と「お金の流れ」



### ③ ガルブレイズの言葉

- 金融における記憶は極めて短い
- 今回だけは違う、という考えほど危険なものはない
- バブルは、他人が設けている姿を見ることで加速する
- 熱狂には必ず理由がある。だからこそ危険なのだ



ジョン・ケネス・ガルブレイズ著作「バブルの物語」より抜粋

## ④ 何がバブルか？

---

○日経平均6万円の今回はバブルと違うのか？

○AI、半導体、防衛、米国大型テックは大丈夫か？

○AI革命は本物？

○生成AIは社会を変える？

○期待が先行し過ぎていないか？

○技術は本物でもバブルは起きるの？

## ⑤ 結論(バブルは無くならない)

---

- 「今回は違う」を疑え
- レバレッジを警戒せよ
- 群集心理から距離を取れ
- 人間は必ず忘れることを忘れるな
- SNSの「成功者」「億り人」を見すぎるな

『資本主義が存在し、人間が強欲である限り、バブルとその崩壊は「周期的な摂理」  
として、今後も形を変えて発生し続ける』

ガルブレイズ著作「バブルの物語」より抜粋